

放射線治療情報システムの更新に伴い、カスタマイズしたことによる機能性の向上

大垣市民病院 放射線治療室 松山 哲也

近年、病院情報システム(Hospital Information System : HIS)、放射線情報システム(Radiotherapy Information System : RIS)の導入が加速的に増加している。しかし、導入したシステムの稼働年数は、概ね5~6年であり、装置の耐用年数、対応するコンピュータのOS(Operation System)の変化により、更新が必要となる。しかし、システムの更新は病院の収益となることは少なく、困難な場合が多い。

当院の放射線治療室における治療 RIS の更新は、Varian 社の放射線治療データ管理システムである ARIA の更新と同時に実施した。更新に際して機能向上を目標とした、治療 RIS の端末などの種類、必要台数、設置場所および内容の変更を行い、発生した問題とその対処、結果についての報告が目的である。

2009 年 11 月に導入した横河医療ソリューションズ社製治療 RIS を 2015 年 4 月に更新を計画したが、2016 年 9 月に更新し、兼ねてから、バージョンアップ予定であった ARIA と同時に更新することにより、照射休止期間を短くなるようにした。スケジューリングと作業効率を検討した。

治療 RIS の更新により、存在価値、重要性を再認識し、利便性は向上した。今回の作業にはよる照射休止期間は、1 日であった。また、作業期間前後において、大きなトラブルはなかった。

更新中の問題として、患者情報の表示や分割表示の不具合や自施設の運用と帳票の記載項目の乖離、CSV 出力情報の誤り等があげられた。これらは更新期間中に対処出来ないことが多く、マイナーバージョンアップを待つことが多かった。

自施設では更新の上のカスタマイズとして、患者実施一覧の色彩の変更により、直感的に表示を認識し易い様にした。さらに、治療実施画面では Field 情報の順番を変え、いらない項目を削除した。これにより、スループットの向上や誤認識の防止などが図れると思われる。

導入した時より一層、更新の時期にいたるまでに、前もって綿密な計画をすることが大切で、更新により、環境整備が充実し、施設の利益につながるように考えておくことが必要である。